

## S-HTP 研究の文献検討

—研究テーマの多様化を中心に—

纈 纈 千 晶<sup>1)</sup>

### はじめに

海外における描画法心理検査の研究分野においては、1920～1950年代にかけて、現在に至っても描画法の中枢をなす検査が次々と考案された。まず、1926年に Goodenough が、対象者に1人の人間を描かせる『Draw-A-Man Test (DAM)』を開発した。DAMの測定対象は子どもの知的発達水準であり、描画法ではあるが、知能検査としての側面が強い。一方、対象者の人格構造や精神病理、および無意識レベルまでを測定する人格検査としての目的で開発された描画法としては Buck (1948) の『House-Tree-Person technique (HTP)』、Koch (1949) の『Baum Test』が代表的である。この2人に共通した点は、クライアントとの治療的な関りを重視して病理指標や解釈仮説を構築したことである。また、Hulse (1952) は家族間の精神力動に着目して『Family Drawing Test (FDT)』を発表した。これらの描画法は現在も心理臨床現場で多く使用され、研究も続けられている。

本邦においては、1974年に高橋により、BuckのHTPに Machover (1949)の人物画テストを組み合わせ、最初に描いた人物と反対の性の人物を描かせる『House-Tree-Person-Person technique (HTPP)』が発表された。その後、しばらくの期間は、より科学的であろうとする心理臨床の世界において、描画法は主観性を払拭しきれないという理由から、やや否定的に捉えられ、活発な描画研究は行われなかったようである(三上, 1995)。しかし、実践的利用価値を重視する精神医療の現場においてHTPやHTPPなどの描画法は有益であるとして幅広く使用され、精神障害者の人格構造や病理水準、治療経過の指標など、測定を行いたい目的と必要性に応じて変法が開発されていった。本論文においては、その変法のひとつである『Synthetic House-Tree-Person technique (S-HTP)』を取り上げる。

### S-HTPの実施方法と使用利点

使用する用具はA4の画用紙1枚とHBの鉛筆2～3本と消しゴム1個である。

画用紙を横にして使用するように伝えた後に、「家と人と木を入れて、何でも好きな絵を描いてください」という指示によって始める。時間制限は行わない方が望ましいが、研究調査などで集団施行をする場合には30～40分程度の時間枠を設ける必要もある。

S-HTPはHTPから発展したものであるが、HTPとは異なる独自の利点をもつ描画法である。それは以下の4点にまとめられる。

- ① 複数の絵を描く必要がなく、1枚を描けばよいので、対象者の負担が軽度で、エネルギー水準が低下した人や描画に抵抗がある人でも、比較的受検しやすい。また、集団検査も実施しやすい。
- ② 家・木・人をどのように描いたかに加え、家と木と人がどのように関連づけられているかによって、対象者の社会への意識や集団力動的側面を理解することができる。
- ③ 家・木・人の3つの課題以外に何か描き加えるかどうかは対象者の意思に委ねられる。また、“人”については、棒人間やシルエットを描くことを禁止しない。S-HTPは課題画ではあるが、極めて自由度が高く、対象者の心の状態が直接的に表現されやすい。
- ④ 描画研究においては、絵の全体的な統合を評定する方が信頼性・妥当性が高いことが明らかにされており、S-HTPは家と木と人の相互関係において、より多様な全体的評定が可能である。

### 目的

本研究においては、S-HTPの先行研究を概観することにより、S-HTPの開発、1970年代から現代に至るまでの研究および臨床における用いられ方、その結果、得られた知見や描画指標・解釈仮説などをまとめ、特に2000年代からのS-HTPにおける研究テーマの変化について紹

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)(指導教員: 森田美弥子教授)

介することを目的とする。

## S-HTP の開発

上述したようにS-HTPは本邦において開発された描画法である。細木・中井・大森・高橋（1971）はHTPの変法として、家・木・人すべてを1枚の紙に描くという方法をはじめて施行し、S-HTPの基礎となった『多面的HTP法』を開発した。しかし、『多面的HTP法』は、中井（1971）の「枠づけ法」を応用しているため、現在のS-HTPとは施行がかなり異なる。画用紙を3枚使用し、1枚目は画用紙に枠づけした後、さらにその枠内を縦に3分割し、それぞれの枠の中に家・木・人を単独で描かせる（非統合型HTP）。2枚目は用紙全体に一つの枠を描いた中に家・木・人を自由に描かせる（閉鎖型HTP）。そして3枚目は画用紙には何も加えずに描かせる（開放型HTP）。この開放型HTPが現在のS-HTPと同様のものである。細木ら（1971）は各描画空間について、非統合型HTPは入院や施設への収容時の個人の適応状態を、閉鎖型HTPは家族内での適応状態を示し、開放型HTPは社会における適応状態を示すと仮定した。この解釈仮説に基づき、種々の精神障害者に『多面的HTP法』を施行したところ、特に不登校の患者や入退院を繰り返す患者などの適応病理を把握し、入退院の時期、予後の判定の指標として有効であると述べている。

三上（1995）によれば、その後も精神医療の現場においては1枚の紙に家と木と人を描くという現在の方式によるS-HTPは実践的に広く使用されていた。しかし、初期の頃は検査者や検査環境によって、施行方法に多少の相違はあったようである。臨床心理学研究の対象として取り上げられたのは、1979年に統合失調症<sup>1</sup>の患者を対象にした三上の2編の研究論文がはじめてである。その後、バウム・テストや風景構成法などと比較すれば、はるかに少数ではあるが、S-HTPの研究は、後述するように地道に蓄積されてきている。

## 統合失調症に関する研究

1970年代～1980年代におけるS-HTP研究は、統合失調症者を対象にした内容が中心である（三上、1979a；三上、1979b；三上・岩崎、1981；市川、1988；森田、1989；須賀、1985；須賀、1987）。

統合失調症者に対する心理検査としては、ロールシャッハ・テストも施行されたが、言語を媒介とすることや所要時間が長く、施行が困難な場合もあったため、それに代わる検査が求められた。その際、HTPやHTPPではなくS-HTPが採択されたのは、1枚の絵を描くことでよいので患者の負担が少なく、抵抗も少ないこと、家

と木と人を描くことによって、患者の意識的・無意識的な自己像や外界への興味や関わり方など多面的な情報が得られる有用性があったからである（三上、1979a；森田、1989）。

このように、精神医療の現場での有用性は認められていたが、研究は少なかった。初期の統合失調症者のS-HTP研究においては、主として形式的な描画特徴、その治療経過に伴う変化などを検討し、統合失調症の病理指標・解釈仮説を定めることが、各研究者に共通した目的であったと考えられる（三上、1979a；三上、1979b；市川、1988；森田、1989；須賀、1985；須賀、1987）。

三上（1979a）と須賀（1985、1987）は、統合失調症者と健常者のS-HTPの形式的描画特徴の出現率を比較検討した。その結果、統合失調症者は健常者より、「絵全体の統合性の欠如」、「遠近感の欠如」、「人の真正面向き」、「直立不動」、「付加物の欠如」が有意に多く認められた点で一致している。三上（1979a）は「絵全体の統合性」や「遠近感」のような、全体的評定について、“分裂病者の内界をそのまま反映するものであり、全体的評定項目は、診断や予後の判定にも有力な手がかりになる”と述べ、須賀（1985）も、統合失調症者の描画は“内容面には一定の傾向はないが、描画形式には特異的特徴がある”と述べている。

統合失調症者の描画特徴としてアイテムの描写特徴以上に、絵の全体的特徴が重要であることに着目した森田（1989）は、統合失調症群と健常群にS-HTPを施行し、絵の全体的評定について因子分析を行った結果、「統合的現実性」、「快適感」、「空間性」、「色彩の豊かさ」の4因子が得られた。統合失調症群と健常群の因子得点の比較では、4因子すべてにおいて有意差が認められた。

市川（1988）は、“病者の描画からの情報を臨床に役立てようとする臨床家は、（中略）個々の要素的な描画仮説とは別に、経験的、直感的に得た、より集約的な指標を持ち合わせているものと思われる”と述べ、集約的指標を客観的手続きにより抽出することを目的として、139名の統合失調症者のS-HTPの描画特徴を数量化第Ⅲ類を用いて分析した結果、3つの視点が抽出された。視点1は、「全体の構成力」、「画面使用度」など、描き手の「関係性の考慮」、「統合」といった精神活動のあり方に関連すると考えられた。視点2は「筆圧」、「課題の形態質」など、描き手の「自我境界」や「現実検出力」などに関連すると考えられた。視点3は「人物像の記号化」など、描き手の防衛力や意欲に関連する可能性が伺えた。

三上・岩崎（1981）は、統合失調症者の描画特徴を読み解く新たな手がかりとして、発達の視点からの研究を行っている。統合失調症者の描画特徴が退行現象を示す

ものなのか否かを検討するために、幼稚園児から大学生までを対象にS-HTPを施行して描画発達の流れをつかみ、統合失調症者の描画特徴との比較検討を行った。その結果、統合失調症者の描画特徴の中で、幼稚園児や小学生に対応するものは、「人」を中心としたわずかな項目に限られており、統合失調症者の描画特徴は、発達段階における退行現象とは異なるものを表すことが示された。

## S-HTPの体系化

1979年以来、S-HTPにおける統合失調症者の描画特徴について継続した研究を行ってきた三上は、1991年に、離婚家庭13組の母子を対象とした研究で、3歳～12歳の子どもにS-HTPを施行し、母親には東大式エゴグラム(TEG)を施行し、母親のCP(Critical Parent)得点が高い場合、その子どもの絵はアイテムの描画サイズが全体に小さく萎縮しているなど、母子間の検査結果に高い相互関連性がみられたことを報告している。そのあたりから、三上の研究の関心は精神病理から、描画の発達過程に移行していったようである。そして、それまでの蓄積された研究データ、および研究結果に基づいて、S-HTPの入門・解説書である『S-HTP法—統合型HTP法の臨牀的・発達のアプローチ』(三上、1995)を著し、S-HTPを体系的にまとめ上げた。S-HTPの具体的な施行方法、基礎的な解釈を述べた後に、統合失調症、うつ病、境界性人格障害、神経症・心身症について、それぞれのS-HTPの描画特徴や受検態度の特徴などが述べられている。統合失調症に関しては、アイテム・評定項目の出現率などの数値や統計データも示されている。子どもと知的障害者の事例研究に続いて、S-HTPについての豊富な経験と実績を活かした考察が、主に発達の視点から述べられている。

さらに、『描画テストに表れた子どもの心の危機・S-HTPにおける1981年と1997～99年の比較』(三沢、2002)においては、1980年代の小学生のS-HTPと、1990年代後半の小学生のS-HTPを比較検討した研究結果から、1990年代後半のS-HTPには、①攻撃的な絵の増加、②非現実的な表現の増加、③小さく暖かみのない“家”の増加、④棒人間など簡略化した“人”の増加、⑤高学年での描画の発達レベルの停滞を指摘し、子どもに情緒的側面の荒廃や空虚化が認められ、今後も、これらの傾向が進んでいくことを危惧している。

また、三沢(2002)は、こうした情緒的側面の問題には、核家族化や地域コミュニティの減少により、子どもが幼児期から多様な人間関係を経験しないまま成長していること、「お受験」などと言われる早期教育により、情緒

的側面を欠いた知的側面の発達のみが促進されていること、および、パソコンやTVゲームが作り上げるバーチャルな世界が過度に浸透していることなどが影響している可能性を指摘している。

以降、三沢は、幼少期からの発達過程において、養育者や周囲の人たちと、直接「話す」、「聞く」、「遊ぶ」など、親密なバーバル・コミュニケーション、およびノンバーバル・コミュニケーションを、どの程度、経験してきたかという視点から、現代の幼稚園児から大学生までのS-HTPにおける描画特徴の分析・検討を行っている(三沢、2008;三沢、2009)。

## S-HTP研究の発展と拡がり

上記したようにS-HTPは元来、精神医療の現場における必要性から発展した描画法である。しかし、現代においては心理臨床の現場も教育・福祉・司法・産業などに広がり、S-HTPも多様化した研究分野で使用されており、その研究数は2000年代に入ってから増加がみられる。その背景のひとつとして、一丸・倉永・森田・鈴木(2001)の研究の影響が考えられる。一丸らの研究においては、1988年1月に下校途中の小学6年生男子が通り魔によって殺される事件が発生し、教育関係者への心理的支援の一環として、当該小学校の全児童を対象にS-HTPを事件後の1年間に3回継続施行した結果が検討されている。事件に心理的影響を受けたと認められた生徒のS-HTPは、①攻撃性、混乱などを特徴とする「興奮」と、感情の抑止、非現実感をなど特徴とする「麻痺」の2つのタイプに分かれた。②影響がみられた生徒は1回目の施行で40%、2回目で26%、3回目で14%と時間経過とともに減少した。③影響を受けた割合は男子59.6%、女子20.9%で、男子の方がより影響が大きい。④事件現場にいた児童や被害者の弟妹など、被害者に近い児童には影響がより強烈に現れたことなどが報告された。統計による形式分析と並行して、描画特徴の意味するものを詳細に検討する内容分析が行われ、描画の専門家でなくとも理解がしやすい。また、一丸ら(2001)は、「S-HTPは、適度の自由度をもつ描画法である。家、木、人の三つのアイテムに付加物を自由に追加することにより、多様な表現が可能である。とくに自己と外界との関係や、個人が関心を持っているテーマが表現できるという点で有効である」、「まったくの自由画でないことも、それが一種の枠づけとなって児童の安全感を高め、また評定にあたって個人間の比較をする上でも役立つ」と、S-HTPの有用性を非常に的確に述べている。このことにより、S-HTPに対する関心や評定が高まったのではないかと考えられる。

また、教育現場では、公立中学校を中心としたスクール・カウンセラーの配置が拡大し、大学においても、抑うつ傾向、身体化や行動化、パニック発作、および広汎性発達障害傾向などがみられる学生が増加したことにより、学生相談室の需要が高まり、創設数が増えるとともに、以前は、ほぼ相談・カウンセリングに限られていた学生相談室のカウンセラーの職務内容も、病的傾向のアセスメント、医療機関への紹介や連携など幅広くなった。それに伴い、小・中学校や高校、および大学において心理検査を施行する必要性も高まっている。しかし、医療現場とは異なり、特に小・中学校や高校においては、検査を行うまでに管理職教員や保護者の同意を得る手続きが必要であり、検査時間も限られているなどの様々な制約条件がある。そのような状況で、S-HTPは、絵を描いて、PDIに答えてもらうという、保護者や教職員にも説明がしやすく、理解も得やすい心理検査である。対象となる児童・生徒の抵抗も少ない。また、施行に多くの時間を必要としないにもかかわらず、結果から得られる情報は多様である点が非常に重要である。このように、S-HTPが現代の心理臨床現場に適した心理検査であることも、研究数増加の一因であると考えられる。

## S-HTP 研究の多様性

### ① 基礎的研究

田畑 (2006) は、S-HTPの描画特徴は発達と関連しており、年齢段階により変化するという三上 (1995) の指摘を検討するために、大学生30名を対象として集団形式でS-HTPを実施し、三上 (1995) の評定項目に基づいて、対象者を分類、各評定項目 (描画特徴) の出現率を三上 (1995) の結果との比較を行った。田畑の仮説は、年齢に伴って「絵の統合性」が向上し、適度な遠近感をもった表現になるというものであった。しかし、「統合性」や「遠近感」など、心理的な発達や知性を示すと考えられる項目の数値は、三上 (1995) が対象とした大学生だけでなく、中学生や高校生よりも低い値を示した。田畑 (2006) は、“家・木・人を1枚の紙に表現するためには、現実検討力が反映し、年齢段階に応じた検討力の変化・向上が描画に反映するはずである”と述べ、これが逆転した転結果が示されたことについて、“今回の対象となった大学生の多くは、描画を自己の精神性と関係づけて表現するよりは、単純に羅列することに主眼があったともいえよう”と理解している。しかし、三沢 (2008) は「統合性」や「遠近感」などが認められ、年齢に応じた心理的発達をしている大学生は現代に至るほど減少していると報告しており、大学生の発達の停滞に対する危惧を呈

しているので、田畑の対象者が特異であったわけではないと考えてよいであろう。

渋川・松下 (2007) は、三上 (1979a, 1979b) 以降、発表されたS-HTPの基礎的研究を中心に、①臨床研究、②発達研究、③内容研究、④構造研究という4つの側面から概観したうえで、S-HTPの全体的評定項目である「統合性」、「遠近感」、「人と家・木の関係づけ」という3つの観点から考察を行った。その結果、①臨床研究においては、統合失調症者やうつ病患者などの臨床群の弁別や、病態の変化などを反映する多くの項目、特徴が指摘され、全体的に、その有用性を支持するものが多かった。②発達研究においては、調査対象者の年代にかかわらず、描画発達の遅滞や、発達レベルの低下が指摘された。③内容研究においては、人と家・木の関係づけには、描き手自身の行動の基準を内的なもの (木) に求めるか、外的なもの (家) に求めるかといった基本パターンが反映されること明らかになった。④構造研究においては、S-HTPの最大の特徴である「統合性」を定量化するためには、信頼性・妥当性を含めて検討を重ねる必要があることが示された。

伊藤・酒井・篠竹 (2009) は、現代の小学生にみられる心理発達のな特徴について検討することを目的とし、2006年に、小学校2年生93名と5年生68名を対象にS-HTPを集団形式で施行した。回収したS-HTPについて、三沢 (2002) の小学生の描画特徴に関する研究との比較を行っている。「絵の統合性」、「簡略化」、「不安感・感情の未分化傾向」、「特殊な描き方」などの項目に着目したところ、2006年の小学生においては、精神エネルギーが低下し、対人的な関わりや不安から回避しようとする傾向が強く、従来の子どもにみられた健全な依存心が抑制されている一方で、有能感を補償するために過度の自己統制を行う傾向が示された。こうした傾向は2年生でも高まっていることが明らかであった。また、5年生においては、描画発達の停滞傾向がみられた。三沢 (2002) が指摘した1990年代後期の小学生の描画発達の停滞という傾向は、2006年においても改善されることなく、続いているものであった。しかし、一方で、「絵の統合性」については、「統合的」な絵を描く群と、「羅列的」な絵を描く群に二極化したことから、三沢 (2002) の指摘する小学生における描画発達の停滞は、小学生全般に当てはまる傾向ではない可能性が示唆された。

田畑 (2011) は、S-HTPにおける家・木・人の描画順序に着目した研究を行っている。208名の大学生を対象に、集団形式でS-HTPを施行し、描画後に画用紙の裏面に家・木・人の描画の順番を記入させた。最初に家を描いた対象者 (H群) が80.2%を占め、木を描いた対象者 (T

群) 17.3%, 人を描いた対象者 (P群) が2.5%であった。統計分析の結果、H群と比較してT群は木が大きく、用紙の下端から描かれる傾向がみられた。P群は描画サイズは小さく、付加物が少なかった。田畑 (2006) は“描画順には描画課題のもつ意味性が反映されていることが示唆された”と述べている。

## ② 青年期研究

青年期の対象者の心理的特性を質問紙によって捉え、その特性がS-HTPの描画特徴とどのように関連しているのかを検討した研究として、青山・市川 (2006)、額額・森田 (2010, 2011) がある。対象者はいずれも大学生である。

青山・市川 (2006) は、青年期のアイデンティティ感覚の様相が、S-HTPにどのように反映するのかを検討している。アイデンティティ感覚の測定には多次元の自我同一性尺度 (MEIS) を用いている。S-HTPの評定は三上・三沢を参考に、①全体的評定項目、②家に関する評定項目、③木、④人の4種、計101項目を設定した。結果として、青年期のアイデンティティ感覚は、S-HTPの「遠近描写」、「木と人の関連づけ」、「人物表現の明瞭度」、「木と枝と根の描写」の4点との関連が示された。特に、「人物表現の明瞭度」は、S-HTPにおいてアイデンティティ感覚を最も敏感に反映することが指摘される。これは人物像が意識的自己像を象徴するというS-HTPの解釈仮説に合致する結果である。

額額・森田 (2010, 2011) は、現代青年の描画発達停滞の要因として、孤立家族化、地域社会の希薄化、ゲームやネット世界への浸透などが進み、人とのコミュニケーションが乏しく成長したためであるという三沢 (2008, 2009) の仮説の検討を目的として研究を行った。2010年には、Parental Bonding Instrument (PBI) で測定した両親の養育態度と、大学生のS-HTPの描画特徴との関連を検討した結果、両親の養育態度により分類された4群の間でS-HTPの「統合性」その他の項目において差がみられ、親の愛情を受け、自立を認められていると思う青年の絵にはまとまりと成熟がみられ、親が自分に無関心であると思う青年の絵は非現実的で未熟さがみられたことを報告した。

2011年においては、友人関係を取り上げ、『他者との交流態度』について自由記述式の調査を行い、友人にどの程度、内面開示できる深い関わりがあるのかを基準に、対象者を「社交群」、「信頼群」、「距離群」、「希薄群」に4分類し、 $\chi^2$ 検定を行った結果、S-HTPの「人数」(三沢, 1995, 2002) など従来の項目に加え、「画面全体の塗りつぶし」、「幹・上下開放」という独自の項目においても

4群の間で差がみられた。S-HTPは、対象者の社会性や他者への意識などを反映しており、「画面全体の塗りつぶし」は防衛の強さ、内的エネルギーの低下、ひきこもり傾向を示唆し、「幹・上下開放」は感情と理性のバランスが崩れて不安や自信のなさが強く、統制力の低下を表すと考えられた。こうした点から、現代青年の特徴について、不安や自己否定感が強く、感情の安定を保つことが困難である。そのために、他者との適度な関係を形成することにも難しさや疲労を感じる人が多いという示唆が得られた。

## ③ パーソナリティー研究

S-HTPとロールシャッハ・テスト (以下ロ・テストと略す) の関連から、対象者のパーソナリティーや適応を検討した研究が、根本 (1998)、武藤 (2011)、高崎 (2011) によって行われている。

根本 (1998) は大学生80名を対象として、S-HTPにおける家・木・人の課題アイテム間の位置関係と、ロ・テストの体験型の関連を検討し、①S-HTPで人を木寄りに描いた群と家の中に人を描いた群はロ・テストの体験型が内向型である。②人を家寄りに描いた群は外向型である。③家と人の中間に人を描いた群は両向型であるという結果を示した。

武藤 (2011) は対象者の大学生8名をランダムに2群に分けて、1つの群にはHBの鉛筆で最初に無彩色のS-HTPを描かせ、次に色鉛筆を用いて彩色のS-HTPを描かせた。もう1つの群には最初に彩色のS-HTPを、次に無彩色のS-HTPを描かせて2群の絵の相違を比較検討した。その結果、①無彩色から彩色の施行順序においては、対象者の防衛的態度がとれ、本来備えているパーソナリティーや情緒的側面が端的に表現される。そこには対象者のより適応的な面が表れやすい。②彩色から無彩色の施行順序においては、1枚目の絵の構成、ストーリーが2枚目にも継続して表れる。しかし、彩色の効果により精神的な負荷が生じ、2枚目には神経症的な側面が表れやすくなるという傾向がみられた。そして、S-HTPの後日に各群から2名ずつにロ・テストを施行し、S-HTPの描画特徴との関連を事例的に検討した結果、4名全員の現実検討力、知的側面などはS-HTPとロ・テストで概ね一致がみられたが、情緒的側面では検査間で一致していなかった。これにはS-HTPとロ・テストの検査状況の違いや、特に色彩による刺激の影響が考えられた。

高崎 (2001) はS-HTPにおける評定項目「統合性」は、パーソナリティーの一貫性や連続性を支えるのに働く自我の統合機能を表すのではないかと考え、ロ・テストから自我の統合機能の合成得点を作成して高・低群に分

け、「統合性」について検討したところ、自我の統合機能が高ければ、「統合性」も高い可能性を見出した。しかし、「統合性」から自我の統合機能を推測することはできなかった。

パーソナリティ特徴を把握する上で、S-HTPとロ・テストの関連性から見ていくことは、非常に興味深い。しかし、上記の3研究においては、ある程度の関連性は認められたものの、一方の検査結果から、もう一方の検査結果を予測できるような関係は示されていない。難しいテーマではあるが、今後も探索的な研究が続けられていくことを期待したい。

#### ④応用研究

ここでは、S-HTPの変法の使用や、国際研究など、まだ少数ではあるが、新しい視点からの研究について述べる。

稲田 (2003) は、I群：小学3, 4, 5年生 (学童期・計95名) と、II群：中学1年生 (青年期前期：123名) を対象として、心像風景がS-HTPの中にいかに表れるのかについて検討を行った。その際、“子どもが何らかの内的なイメージを表出するときには動物のモチーフが使われているように感じる。(中略) 彼らは無意識のうちに、または直感的に、自分の内的イメージの表現に際してどのような選択をするのだろう。人は動物を描くとき、動物を使者として使うことで現実に縛られている自我を通過して、こころの深い部分である森の中への探索が可能になるのではないだろうか”と述べ、家・木・人に加えて「動物」を課題とした。結果として、“動物”については、ウサギとネコがI群の女子に有意に多くみられた。これについて、稲田 (2003) は、思春期にあたるII群の女子にとって、思春期の心理的な不確かさや、おぼつかなさに対する抵抗として、一般的には少女が好むといわれ、女性性を象徴するネコやウサギを無意識遠ざけているのではないだろうかと考察している。

次に、近藤 (2008, 2010, 2011) が、「特定の場面と他者に制限せず、描き手の対象関係をアセスメントする技法」として発表したものが、S-HTPとHTPPを統合させた『Synthetic House-Tree-Person-Person technique (S-HTPP)』である。S-HTPPは、S-HTP同様、1枚の画用紙にすべての課題を描く方法であるが、人物は「男性」と「女性」と決められており、この点ではS-HTPよりも自由度は低いといえる。近藤 (2008) は、“自己と他者をアセスメントする上で、同性像と異性像は適切な課題であると考えられる。(中略) それらを一枚の画用紙に描くことで、人物像の関係性、情緒的な距離、雰囲気などが表現され、量的にも質的にも豊かな情報が得られ

る”、“S-HTPPに描かれる人物像の年齢や関係性、行為、感情は、描き手にとって、日常的で穏やかなものも多く、描き手の現在や体験している内的世界が表現されているようであった”と述べるとともに、さらに取り組むべき課題として、S-HTPPにおける家と木についての知見が得られていないので、今後は家と木を視野に含めて検討することで、多角的な視点からS-HTPPを理解する必要性を述べている。

入江・有門・菅原 (2009) は、国際的に地域社会を研究する専門家であり、長年タイ北部および東北部において、貧困による家庭崩壊、HIV感染によるエイズ遺児の出現などにより、厳しい環境の中で育たざるを得ない多くの子どもたちに接してきた。そのような困難な養育環境や生活状況、子どもたちにどのような心理的影響を与えているのかを明らかにするために、三沢直子に協力と指導を依頼して、2009年にタイ北部・東北部において子どもたちにS-HTPを施行した。その結果、家庭状況に何らかの問題を抱えていると判断される子どもであっても、情緒的な発達は順調であることが明らかになった。この背景には、タイ農村部伝統的コミュニティ、あるいは社会開発によって再構築されたコミュニティの中で、地域住民が日常的に、年代を超えて相互交流を行っていることが関連すると考えられた。三沢は2002年以降、子どもの情緒的側面の豊かな発達には、地域コミュニティにおける世代を超えた人たちとの親密なコミュニケーションが重要であると論じ続けているが、この研究結果は、それを支持するものとなっている。

#### まとめ

S-HTPの研究論文を概観し、1970年～1980年代における初期の研究では、精神医療の現場において、主に統合失調症者の描画特徴を形式的に分析・検討し病理指標・解釈仮説が構築され、2000年頃から、心理臨床家の活動領域の拡大とともに、S-HTPの対象者や研究目的も多様化し始めたことが示された。本論文では研究目的や検討内容によって、①基礎的研究、②青年期研究、③パーソナリティ研究、④応用研究に分類し、各研究の主要な部分を簡潔にまとめて紹介した。

こうした多様な研究結果をふまえ、三沢の一連の研究などからも示唆されているような、現代にみられる新たな描画指標・解釈仮説を構築していくことが、筆者らS-HTPの研究者にとっては重要な課題である。

#### 引用文献

青山桂子・市川珠理 (2006). 青年期におけるアイデンティティの感覚と統合的HTPの描画特徴 心理臨

- 床学研究, 24-2, 232-237.
- Buck, J. N. (1948). The H-T-P technique: a qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, 4, 317-396. 加藤孝正・荻野恒一 (訳) 1982 HTP 診断法 新曜社
- Goodenough, F. L. (1926). *Measurement of intelligence by Drawing*. World Book Company.
- 細木照敬・中井久夫・大森淑子・高橋尚美 (1971). 多面的 HTP 法の試み 芸術療法, 3, 61-65.
- 市川珠理 (1988). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画構造 —多変量解析による分析 臨床精神医学, 17-8, 1221-1233.
- 一丸藤太郎・倉永恭子・森田裕司・鈴木健一 (2001). 通り魔殺人が児童に及ぼした影響 —継続実施した S-HTP から 心理臨床学研究, 19-4, 329-341.
- Hulse, W. (1952). Childhood conflict expressed through family drawing. *Journal of Projective Technique*, 25, 441-450.
- 稲田圭子 (2003). S-HTP を用いた学童期・思春期の心像世界への接近 —樹木・動物の描画変化との関連から 島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要, 1, 63-72.
- 入江詩子・有門恵・菅原良子 (2009). 子どもの育ちと地域社会の在り方に関する一考察 —タイ北部・東北部における描画テストからみえてきたもの 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要, 7-1, 47-72.
- 伊藤菜穂子・酒井健・篠竹利和 (2009). 統合型 HTP 法における小学生の描画特徴 日本大学文理学部心理臨床センター紀要, 6-1, 33-48.
- Koch, K. (1949). *Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches hilfsmittel*. Hanx Huber, Bern u. stuttgart.
- 瀧瀬千晶・森田美弥子 (2010). 大学生における両親の養育態度と S-HTP の描画特徴の関連 —精神的成熟度からの検討 臨床描画研究, 25, 128-145.
- 瀧瀬千晶・森田美弥子 (2011). 現代青年の友人への交流態度からみた S-HTP の描画特徴 心理臨床学研究, 29-5, 128-145. 634-639.
- 近藤孝司 (2008). S-HTPP (Synthetic House Tree Person test) の基礎的研究 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 8-1, 31-39.
- 近藤孝司 (2010). S-HTPP 法における第2の分離個体化の様相 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 10-1, 21-35.
- 近藤孝司 (2011). 描画法による対象関係のアセスメント —S-HTPP 法における、描かれた人物像の相互作用の検討 臨床描画研究, 24, 146-162.
- Machover, K. (1949). *Personality Projection in The drawing of Human Figure*. C. C. Thomas.
- 三上直子 (1979a). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画分析 —一般人との統計的比較 臨床精神医学, 8, 79-90.
- 三上直子 (1979b). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画分析 —病態に応じた継時的変化 臨床精神医学, 8, 1479-1487, 90.
- 三上直子 (1992). 母子関係の悪化に対する予防的アプローチ —離婚家庭13組の母子にエゴグラムと統合型 HTP 法を実施して 心理臨床学研究, 10-1, 76-83.
- 三上直子 (1995). S-HTP 法 —統合型 HTP 法の臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- 三上直子・岩崎和江 (1981). 統合的 HTP 法における幼稚園児から大学生までの描画発達 —分裂病者との描画特徴との関連において 臨床精神医学, 10, 1331-1339.
- 三沢直子 (2002). 描画テストに表れた子どもの心の危機 —S-HTP における1981年と1997~99年の比較 誠信書房
- 三沢直子 (2008). 描画テスト (S-HTP) に表れた子どもの発達の問題 臨床描画研究, 23, 64-81.
- 三沢直子 (2009). 統合型 HTP 法を子どもの心理検査として有効利用するための基礎研究 明治大学人文科学研究所紀要, 65, 293-338.
- 森田裕司 (1989). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画特徴 —全体的評定による因子分析 心理臨床学研究, 6-2, 29-39.
- 武藤翔太 (2011). 統合型 HTP 法における無彩色・彩色バッテリーに関する探索的研究 —描画の変化とロールシャッハテストとの関連から 明治大学心理社会学研究, 6, 89-100.
- 中井久夫 (1971). 精神分裂病者の精神療法における描画の使用 芸術療法, 2, 77-89.
- 根本句子 (1998). 統合型 HTP 法における3アイテム間の位置関係とロールシャッハ・テストの体験型との関連 ロールシャッハ研究, 2, 33-43.
- 渋谷瑠衣・松下姫歌 (2007). 統合型 HTP 法に関する研究の展望 —「統合性」・「遠近感」・「人と家・木との関係付け」に着目して 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 6, 52-66.
- 須賀良一 (1985). 慢性分裂病における統合力の検討 —分裂病者の描画の数量化3類による分析 臨床精神

医学, 14-5, 801-809.

須賀良一 (1987). 分裂病者の絵画の描画形式と臨床像の相関について —その1. 分裂病者の絵画の描画形式と形式分析における多次元尺度解析法の応用 精神医学, 29-10, 1057-1065.

田畑光司 (2006). 描画テストに関する基礎的研究 —大学生の S-HTP 法 埼玉学園大学紀要・人間学部篇, 6, 111-119.

田畑光司 (2011). 統合型 HTP 法に関する基礎的研究 —描画順について 臨床描画研究 25, 231-239.

高橋雅春 (1974). 描画テスト入門 —HTP テスト 文教書院

高良聖・大森健一 (1994). 精神分裂病者における統合型 HTP 描画変化と予後との関連 臨床精神医学, 23, 485-497.

高崎蘭 (2011). 統合型 HTP と自我の統合機能 臨床心理学研究, 9, 67-81.

## 注釈

- 1) 本邦においては2002年まで『精神分裂病』が診断名として用いられており、参考文献にも『精神分裂病』と表記してあるが、本論文では『統合失調症』に統一した。
- 2) 森田は統合失調症者の色彩特徴を捉え、絵の全体的印象・評定に与える情報量を増やすため、絵に彩色する方法を用いた。
- 3) 三上は2002年以降の著書・論文は、三沢として発表している。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、常に丁寧な御指導をいただきました名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授の森田美弥子先生に心より感謝申し上げます。

(2012年8月31日受稿)



## ABSTRACT

Literature review of study in S-HTP:  
Focusing on the diversification of the studies

Chiaki KOUKETSU

“House-Tree-Person technique (HTP)”, published by Buck in 1948, is a portrayal psychological test to have participants draw a picture of “house”, “tree” and “person” on a piece of paper for each, which is used even today’s psychological front in many countries. In Japan, Hosoki, Nakai, Omori and Takahashi published “Multi-dimensional House Tree-Person technique” (1971), which was an improved version of HTP applied to “Framed Technique” (Nakai, 1971) and would have participants draw a picture of “house”, “tree” and “person” all together on one piece of paper. In this test, each participant uses three pieces of paper. Regarding the first paper, the participants are assigned to divide the drawing paper into three portions and put three frames on them. As for the second paper, they are to put one frame on the whole paper. Then, they are to draw a picture of “house”, “tree” and “person” within the frames. As for the third paper, they are to use it without framing. Although this method was effective, the technique has been improved considering the participant’s burden. In this paper, I discuss “Synthetic House-Tree-Person technique (S-HTP)”, one of the modified versions in which each participant is assigned to draw a picture of “house”, “tree” and “person” all together on a single piece of paper. Other than this assignment, they are free to draw any pictures. Then I present the overview on studies from its early stage to the current one. S-HTP in the 1970s and 1980s were conducted mainly for schizophrenia patients, and the common objective among the researches is thought to examine their drawing characteristics, level of psychopathology, and changes accompanied by the treatment process, and to define pathological index and interpretational hypothesis. Mikami who had been studying S-HTP since 1979 published “Synthetic House-Tree-Person technique”, an introductory and interpretational book that illustrated findings and S-HTP-specific pathologic index and interpretational hypothesis obtained from methods, basic understanding, and accumulated research results. She successfully organized these elements in a systematic manner. Originally, S-HTP was developed from the psychiatric treatment situations, but today it is used in a various fields according to the expansion of clinical psychology fields such as education and public welfare. The number of research has been increasing since 2000 and has been discussed from various points of view. In this paper, I classify those studies into four groups depending on their purpose, participants, and methods. The followings are brief summary. (1) Basic researches: a research to analyze and discuss the formal drawing characteristics of S-HTP, and a comparative research to analyze between Mikami (1995) and Misawa (2002), (2) youth research: a research conducted for youth university students to discuss the relation between psychological aspects, which are characterized in youth such as identity issues and friendship, and drawing characteristics of S-HTP, (3) personality research: a research to examine the relation between personality characteristics obtained by S-HTP and those obtained by Rorschach test, (4) an applied research: a rather minority research to give a new perspective to the usage of modified S-HTP and international researches.

